

# 中学校外国語(英語)における表現力を育むための授業研究

－「書く」領域における言語活動の充実を通して－

塗 師 光 保 子<sup>1</sup>

英語科においては、表現力の育成に向けて「書くこと」の指導を充実し、内容的にまとまりのある文章を書く力を育むことが求められている。本研究では、生徒の表現力を育むため、「『書く』領域における3年間の到達目標」を作成し、学習目標を明確にするとともに、文構造のスパイラルな活用と学習支援の工夫を取り入れた授業を行った。その結果、「書く」領域における生徒の表現力の高まりが見られた。

## はじめに

平成20年の中学校学習指導要領解説外国語編(以下、新学習指導要領解説)に、思考力・判断力・表現力等を育む基本方針の一つとして「自らの考えなどを相手に伝えるための『発信力』やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成を重視する」(文部科学省 2008 p.2)とある。本研究は、中学校から本格的に学習が始まる「書く」領域に着目して、充実した言語活動を取り入れた授業改善に取り組むものである。

本研究では、「自らの考えなどを相手に伝えるための『発信力』」を「英語科における表現力」と定義し、表現力を育むために、「書く」領域において言語活動を充実させる手立てを研究することとした。4技能を総合的に育成する指導の充実が求められている中で、「書く」領域における言語活動を計画することは、他領域の言語活動にも有機的に関連し、教師が4領域を統合して言語活動を行ううえでの指導の柱になると考えたからである。

そこで、新学習指導要領解説に既習の内容を3学年間で繰り返し指導することの重要性が示されていることも踏まえ、中学校3年間を見通した「『書く』領域における3年間の到達目標」の試案を作成し、学習目標を明確にした。そのうえで、言語材料をスパイラルに、繰り返し活用できるような文構造の導入や学習支援を工夫して授業を行うことにより、表現力の育成を目指した。

## 研究の内容

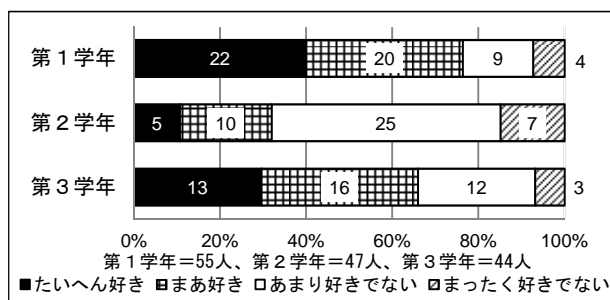
### 1 生徒の実態

#### (1) 英語学習に関する意識調査

所属校の全校生徒 147 名(1年生 54 名、2年生 49 名、3年生 44 名)を対象とした質問紙による事前アン

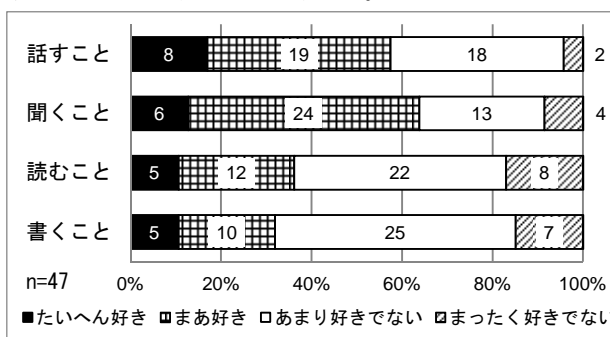
ケート調査を7月に実施し、分析を行った。

各学年における英語科の「書く」領域の学習に関する意識を比較したものが第1図である。第1学年では「たいへん好き」か「まあ好き」であると回答している生徒が8割近く、第3学年では約7割であることに對し、第2学年では約3割にとどまっている。これは、第2学年の授業から徐々にまとまった文章を書く活動が増えてくる一方、自ら考えたことを表現するための語彙や手段を知らない多くの2年生が「書けない」という苦手意識をもったことが原因であると推測する。



第1図 「書く」領域に関する学年毎の意識

また、第2図は第2学年における4領域の学習に関する意識を比較したもののだが、「書く」領域を「たいへん好き」「まあ好き」と回答した生徒は約3割と、他領域に比べて最も少ない。この結果を踏まえ、「書く」領域における授業内容を改善し、言語活動を充実することが必要であると考えた。



第2図 4領域の学習に関する意識 (第2学年)

#### (2) 「書く」領域における表現力

第2学年の全生徒を対象に題材指定の英作文の調査を実施した。「書く」領域における表現力について、新学習指導要領解説が示す「自分の考えや気持ちなど

<sup>1</sup> 鎌倉市立第二中学校

研究分野 (授業改善推進研究 外国語(英語))

が読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」(文部科学省 2008 p. 5)であると捉え、先行研究(村岡 2010)も踏まえて採点基準(第3図)を作成し、内容的にまとまりのある文章を書く力を見とるため、英作文を採点した。

<b>観点1</b> : 内容的に意味の通る文、 <b>観点2</b> : 正確な文の数
○1~2文...1点 ○3~4文...2点 ○5文以上...3点
<b>観点3</b> : 文章構成
○おおよそ文章構成ができており、具体及び感想などが含まれている。...1点
○おおよそ文章構成ができており、主張、意見、具体及び理由などが含まれている。...2点
○読み手を意識して文章構成ができており、主張、意見、具体及び理由などが含まれている。...3点 (各3点満点)

第3図 英作文採点基準

採点基準には三つの観点を設け、各3点の合計9点とした。観点1では、文法的な誤りは減点せず、意味の通る文であれば加点とした。観点2では、文法的な正確さを見た。観点3では、一貫性のある文章になっているかどうかや、文と文の結束性があるかどうかを見た。採点の結果から、文章構成を考えることに課題がある生徒が約7割、正確な文を書くことに課題がある生徒は約6割いることが分かった。また、英作文の調査とともに「書くときに困ること」の調査を行った。調査結果から、約6割の生徒が書くときに「単語や文法が分からない」「何をどのように書けばいいのか分からない」という悩みを抱えていることが分かった。

(3) 調査から読み取った課題

全校生徒対象の調査で学年毎の「書く」領域に関する意識の差が明らかになり、3年間の英語学習を通して育みたい「表現力」が明確でなかったことを筆者の課題として捉えた。また、英作文の採点結果と「書くときに困ること」の記述から、多くの生徒が一つのテーマについて、何をどのように書いたらよいか分から

ず、いくつかの単文を書くことはできても、内容的にまとまりのある文章は書けないことが分かった。調査の結果を踏まえ、自ら考えたことを書いて表現するためには、構想段階での手立てと、学習した言語材料を表現活動に活用する方法を示す必要があると考えた。

2 研究構想

(1) 手立ての設定の視点

学年が進むにつれて段階的に生徒の表現力を育成するためには、育みたい生徒像を明確にしたうえで、3年間の指導の流れを示す表を作成し、活用していくことが必要であると考えた。実際の授業では作成した表を踏まえ、まとまりのある文章を書くための構想立ての段階で、先行研究(喜屋武 2007)を参考に、単語と単語を関連付けてイメージし、発想を広げることができると考えた。実際の授業では作成した表を踏まえ、まとまりのある文章を書くための構想立ての段階で、先行研究(喜屋武 2007)を参考に、単語と単語を関連付けてイメージし、発想を広げることができると考えた。また、マッピングによって構想したものをまとまりのある文章として書くために、既習の内容をスパイラルに活用できるような支援をすることや、単語や文構造、文章の書き方につまずいたときの助けとなるものを用意する等の学習支援が必要であると考えた。

(2) 「『書く』領域における3年間の到達目標」の作成

事前アンケート調査の課題を踏まえ、先行研究(大岩・内藤 2011)を参考に、学年毎の到達目標を掲げた「『書く』領域における3年間の到達目標」を作成した(第4図)。書くことを通して表現する力を育むためには「自分で考えたことを表現する言語活動」(田中武・田中知 2003 p. 8)である自己表現活動を行うことが有効である。そこで「自己関連性」(田中武・田中知 2003 p. 46)が高い題材を設定し、学習支援やMotivation・達成感等、生徒が活動の意義や必然性を感じることが出来る取組みを「言語活動を充実させるための手立て」として示し、3年間の言語活動を計画した。生徒の実態等を踏まえ、第1学年では自分に近

	目標	題材	語数	生徒の活動	言語活動を充実させるための手立て		
					学習支援	Motivation・達成感	言語材料
3年	到達目標：日本の夢を世界に発信できる。また、自分の意見や考えを発信できる。						
	卒業後の進路や将来の夢について、自分の考えが相手に伝わるように、既習の内容を自ら活用して書くことができる。	○I Have a Dream —卒業後の進路と夢—	250語 28文	卒業後の進路や、将来について考えていること・自分の夢・お世話になった人への感謝の気持ちなどを書く。尊敬する人物を一人以上紹介し、尊敬する理由やその人物に関わる情報を含めること。	・お助け単語リスト	・スピーチコンテスト ・スピーチの様子をビデオで撮影 ・作品を卒業文集として冊子にし、家庭に配付	□疑問詞+to不定詞 □疑問詞+SV
	社会問題等についての様々な意見や考えを知り、自分の考えが相手に伝わるように感想、賛否やその理由を書くことができる。	□Social Problems —社会問題について考える—	210語 24文	社会問題等についてディベートをするために、賛成・反対の立場をとって根拠に基づいた意見を書く。家族や地域の人へのインタビューや情報を二つ以上含めること。	・自作単語帳、表現ノートのスヌメ ・マッピング	・ディベート大会 ・家族や地域の人へのインタビュー	□関係代名詞 □現在分詞・過去分詞の形容詞的用法
旅行先での体験について、紹介したい事柄と自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるような表現を工夫して、書くことができる。	△School Trip Newspaper —グループで新聞づくり—	180語 20文	修学旅行先での体験を紹介する新聞記事の作成を通して、ガイドブックに載っていないような自分だけの情報を二つ選び、紹介する理由と自分が実感したことを書く。周辺で出会った外国人観光客にインタビューした内容を含めること。	・既習表現の提示 ・昨年の成果物やスピーチを提示	・外国人観光客へのインタビュー ・文化祭、鎌倉駅地下道ギャラリーに展示	□call(make)- □現在完了形 □動名詞	
2年	到達目標：自分の暮らす地域のことを世界に発信できる。						
	関わりたり楽しみたりすることについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書くことができる。	□School Rules —学校の規則について考える—	150語 18文	「制服は必要か」など学校のきまり事について、ディスカッションをするために、賛成か反対かの立場をとり、自分の意見を具体的に書く。家族や地域の人々の意見の一つを含めること。	・お助け単語リスト	・ディスカッション大会 ・家族や地域の人へのインタビュー	□It is -for-to □agree- □比較表現
	暮らしている地域について、紹介したい事柄などを、自分の考えや気持ちなどが読み手に伝わるように書くことができる。	△Welcome to KAMAKURA —鎌倉案内づくり—	120語 15文	観光客向けの鎌倉案内の作成を通して、ガイドブックに載っていないような自分だけの情報を二つ選び、紹介する理由と自分が実感したことを書く。撮影した写真や地図、イラスト等を加えて、読み手のイメージが湧くように工夫すること。	・自作単語帳のスヌメ ・マッピング	・鎌倉駅地下道ギャラリーに展示	□look- □show A B □動名詞
	将来の夢や、挑戦してみたいことなどについて、自分の気持ちや考えを、まとまりのある文章を書くことができる。	○My Dream —将来の夢—	100語 13文	憧れている職業や、将来やってみようことなどについて、理由を二つ以上と自分の体験や気持ちを添えてスピーチ原稿を書く。その職業に実際に関わる人のインタビューや情報等一つを含めること。	・既習表現の提示 ・昨年の成果物やスピーチを提示	・スピーチコンテスト ・スピーチの様子をビデオで撮影	□to不定詞 □I think that ~ □助動詞will □First...Second...
キャンプでの体験について、自分の気持ちや考えが伝わるように、文と文のつながりに注意して書くことができる。	△Summer Camp —キャンプの体験報告—	80語 10文	キャンプでの楽しかった思い出や学んだことを二つ選び、その内容と自分が感じたことを書く。キャンプの中で使った物や、撮影した写真等を一緒に紹介すること。		・文化祭に展示	□because □There is/are □be going to-	
到達目標：自分や自分の家族のことを紹介できる。							

第4図 「書く」領域における3年間の到達目標(第1学年省略)

い人・物を紹介できること、第2学年では自分が暮らす地域のことを世界に発信できること、第3学年では日本のことや自分の考えを世界に発信できることを目標とした。また、全学年の題材に地域紹介を含めるなど3年間を通してスパイラルな言語活動を行うことで、既習の学習内容を振り返り、意識して活用する姿勢を育むことができると考えた。

### (3) 具体的な手立て

「『書く』領域における3年間の到達目標」を踏まえ、第2学年における授業実践として「鎌倉案内作成」を題材に検証授業を行う。ほとんどの生徒は観光客が多く訪れる鎌倉という地域に育っていることから、自己関連性の高い題材であると考えた。次の3点の手立てを工夫して授業を行い、アンケート調査と生徒の様子や成果物から、表現力の育成の状況に変容が見取れたかどうかについて、有効性を分析する。

#### ア 文構造の指導

新出文構造を表現活動に活用させるため、題材と関連させた導入を行う。

#### イ マッピング

まとまりのある文章のイメージをもたせるため、マッピングを行う。

#### ウ 学習支援

まとまりのある文章の作成のため、BINGOの活用、お助け単語リストの提示、文章の書き方支援を行う。

## 3 検証授業

### (1) 概要

実施期間	平成23年10月27日～11月10日
対象	第2学年2学級49名
使用教科書	New Crown 2 (三省堂)
教材名	Lesson 6 Ratna Talks about India
題材名	「鎌倉を紹介する案内文を書こう」
目標	自分の考えが伝わるように、まとまりのある文章を書く。

学習のねらい	
第1時	・動名詞の理解
第2時	・第4文型の理解
第3時	・look+形容詞の理解 ・マッピングをしてイメージを広げる。(G)
第4～5時	・マッピングのイメージを深め、まとまりのある文章を書く。(G)

(G) = グループでの活動

### (2) 授業づくりの工夫

#### ア 題材を視野に入れた文構造の指導

Lesson 6 の新出文構造である、動名詞、第4文型、look+形容詞を指導するにあたり、自己表現活動の題材である「鎌倉」に関連させた導入を行った。

第1時の動名詞では、鎌倉の人気スポットランキングという導入から、ランキング上位であった鶴岡八幡

宮を例に、“Many people like visiting Hachimangu.” という例文を提示した。第2時では、鶴岡八幡宮の写真を提示しながら、“I’ll show you the picture.” という例文で第4文型の導入を行った。第3時のlook+形容詞の導入では、第2時で使った写真を用いて、“It looks beautiful.” という例文を提示した。

三つの新出文構造を活用して、内容が関連するように例文を導入し、学習を積み重ねることでまとまりのある文章に活用することができるということを生徒に意識させるねらいがあった。

#### イ マッピング

“KAMAKURA” というキーワードから発想することを、住民ならではの情報や推薦する理由、自分の気持ち等を含めて、アイデアが膨らんでいくようにマッピングを行った(第5図)。教え合うことができるように3人グループで行い、英語が得意な生徒と、リーダーシップをとれる生徒が一人ずつ入るように配慮した。また発想したことをすぐに書きとめ、修正できるように、ホワイトボードを使用した。



第5図 マッピングの様子

#### ウ 学習支援の活用

##### (ア) 鎌倉 BINGO

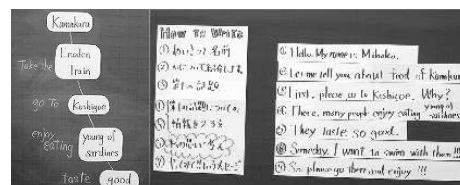
所属校では、全学年の英語の授業開始時に毎回BINGOを行っている。そこで、副教材で使用している『Let’s Enjoy “BINGO”』(浜島書店)を参考に、鎌倉案内作成に活用できる単語を考え、鎌倉BINGOを作成した。通常は単語のみで実施するが、本単元では“I enjoy watching red leaves in Hachimangu.” というように、新出文構造や既習の表現を使った文を聞いて、該当する単語を聞き取るように工夫して実施した。

##### (イ) お助け単語リスト

マッピングで文章を構想するときや、文章を書くときに、辞書よりも手軽に使える表現集として作成した。鎌倉に関わる固有名詞や既習の文構造以外に、代名詞や接続詞等、まとまりのある文章にするために役立つ言語材料を記載した。2年生では未習だが、“I’m proud of～(～を誇りに思う)”等、鎌倉を紹介するときに活用できそうな表現も載せている。

##### (ウ) 文章の書き方支援

マッピングした考えをまとまりのある文章にするための手順を黒板に示した(第6図)。ある生徒が作成したマッピングから五つのキーワードを抜粋し、キー



第6図 マッピングから文章へ

一どの横に動詞を加えて文の一部を作成した後、まとまりのある文章の構造を指導し、見本の英文を示した。

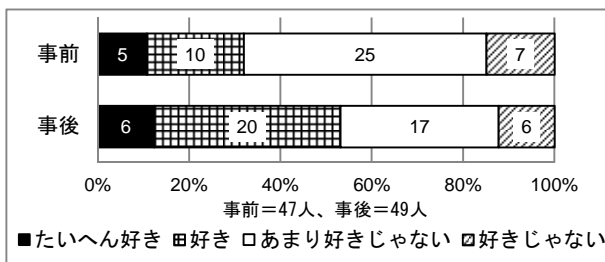
その他に、新出文構造を学習後も生徒が活用できるように、授業で使ったワードカードを教室に毎時間掲示する等、環境整備も学習支援の一つと考え取り組んだ。また、分からない表現を自ら調べようとする姿勢が育つよう、一人1冊辞書を用意した。

#### 4 検証結果

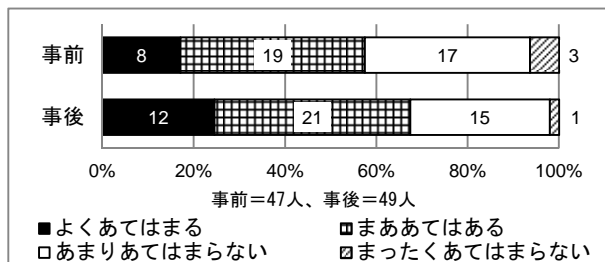
##### (1) 事前事後アンケート調査の意識調査より

検証授業後に実施した意識調査では、「書くこと」に関わる活動について、「好き」と答えた生徒は事前調査では約32%であったが、事後調査では約53%に増加した(第7図)。また、「自分の言いたいことが英語で書けるようになる学習」について、「好き」と答えた生徒は事前調査では約57%であったが、事後調査では約67%に増加した(第8図)。「英語の文を書くのが難しい」かどうかという設問では、「あてはまる」と答えた生徒が事前調査の約83%から、事後調査では約64%に減少している(第9図)。

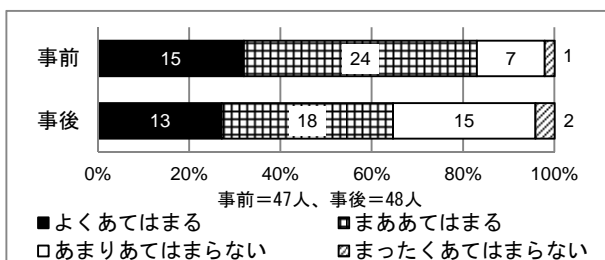
事前・事後調査の比較から、言語材料をスパイラルに活用する文構造の導入や、学習支援を工夫して授業を行ったことが、「書く」領域の学習に関わる生徒の意識に良い変容をもたらしたということを確認することができた。



第7図 書くことに関わる活動



第8図 自分の言いたいことが英語で書けるようになる学習が好き



第9図 英語の文を書くのが難しい

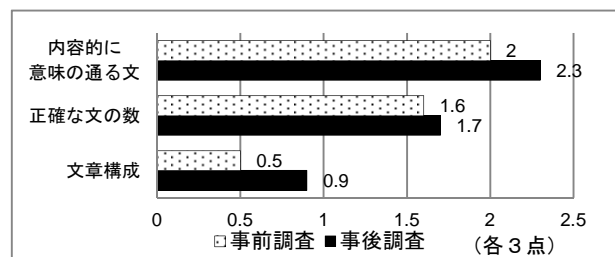
##### (2) 事前事後アンケート調査の英作文より

事後調査で事前調査と同じ題材の英作文に取り組みさせたところ、表現力について良い変容が見られた。第10図は、抽出生徒Aの解答を比較したものである。事前調査では、「is」を用いた単文の羅列で、まとまりのない文章となっている。一方事後調査では、「for example」や接続詞の「so」が使われており、新出文構造の動名詞や、「There are」という既習の文構造を活用して、まとまりのある文章を書こうとしている。

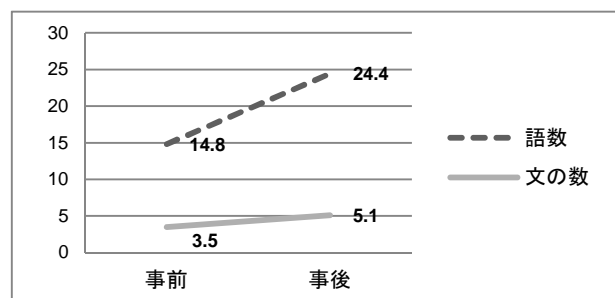
(事前) Hato Sable is juicy. Komachi Street is great. Sea is beautiful.  
 (事後) I like Kamakura. Why? first, I like eating. There are many foods in Kamakura. for example Hato Sable. Second, There are a lot of nature. So I like Kamakura. ※生徒が書き起こした原文のまま記載

第10図 生徒Aの事前事後記述式問題解答

また、第3図の採点基準に基づいて、各生徒の記述を質的な観点ごとに評価した結果をまとめたところ、全ての観点において伸びを確認できた(第11図)。文の数と語数という量的な観点においても同様に伸びを確認した(第12図)。以上の結果から、表現しようとする意欲の高まりと、英語の文章の書き方がほとんど分からなかった状態から抜け出して、何とか書いてみようという姿勢が見られるようになったと言える。



第11図 質的变化(記述式問題)



第12図 量的変化(記述式問題)

##### (3) 検証授業における成果物(「鎌倉案内」)より

第13、14図は抽出生徒BとCの「鎌倉案内」である。Bはあまり英語を得意としない生徒である。単語のつづりや文法表現に誤りが見られ、正確に文を書くことについては課題があるが、まとまりのある文章を書く手順に従って、下線部のように新出文構造の動名詞や「look～」を使って表現しようと努力しており、内容的にまとまりのある文章を書くことができています。

“Hello everyone. My name is B. Let me tell you about Asahinakiridosi. First, Asahinakiridosi is very interesting place. Why? Asahinakiridosi in nature and shrine. Shrine name is kumano shrine. The shrine looks like small and wonderful. So I enjoy running around kumano shrine. So please go there and enjoy.” ※生徒が書き起こした原文のまま記載

第13図 抽出生徒B

Cは比較的英語を得意とする生徒である。Bとは対照的に新出文構造を本文に活用していないが、まとまりのある文章を書く手順に従いながら、辞書やお助け単語リストを活用したり、友人や教師に聞いたりして、下線部のような新しい文法表現や単語を積極的に使っている。自分の思いを表現するために、教師側から提示された学習支援に頼るだけではなく、自分らしい表現を探り出し、書こうとする姿勢を見ることができた。

“Hello. My name is C. Let me tell you about many festivals of Kamakura.

First, please go to Komyoji temple in October. Why? There are great many stalls on the festival day. All of them are very nice. I like chicken stall best. It's big and delicious! Please try it!

Second, please go to fireworks at Yuigahama in August. They are interesting and beautiful. Fireworks last for about an hour. It's a fantastic time. I like it very much. Be sure to watch fireworks.” ※生徒が書き起こした原文のまま記載

第14図 抽出生徒C

## 5 考察

### (1) 「『書く』領域における3年間の到達目標」

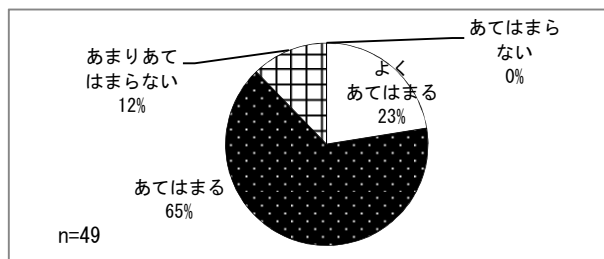
本研究で「『書く』領域における3年間の到達目標」(第4図)を作成することで、3年間を見通した言語活動のスパイラルな指導の方向性と、育てたい生徒像を明確にすることができた。今後この表(第4図)を一層活用していくためには、到達目標が生徒の実態に合っているかどうかを授業毎に振り返り、内容を改善していくことや、個々の生徒の力を見極め、本人の能力に応じた到達目標を常に考えていくことが必要である。さらに、学校の教育目標や生徒の実態を踏まえて、教師間で共有し、改善していくことによって、「『書く』領域における3年間の到達目標」はより一層生徒の実態に即して活用できるものになると考える。

### (2) 検証授業

#### ア 題材を視野に入れた文構造の指導の有効性

授業の振り返りアンケートでは、約88%の生徒が、「授業で学んだ文法事項を表現活動に活用した」と回答している(第15図)。また、実際に文章に用いなくても、「動名詞等の学習と同時に、身近な鎌倉の紹介ができてよかった」という記述から、新出文構造の学

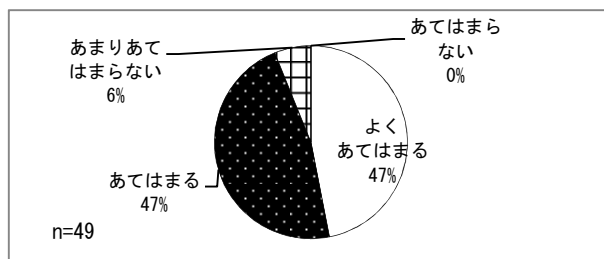
習に前向きに取り組んだことが分かる。文法指導と自己表現活動を一体的に行うことで、コミュニケーションの柱として、文法指導がいきってくるという実感を得ることができた。



第15図 学んだ文法事項を表現活動に活用したイ マッピングの有効性

同アンケートで、約94%の生徒がマッピングについて、「文章構成を考える時に役に立った」と回答している(第16図)。また授業では英語の不得手に関わらず、発想を膨らませながら積極的に取り組む生徒の様子を見ることができたことから、マッピングは何を書けばいいのかという生徒の悩みを解消するとともに、まとまりのある文章を構想するために有効な活動であったことが分かった。

一方、「マッピングを十分にやる時間がなくて、文章の構成ができなかった」という記述があり、2回行った各10分程度の活動では、文章の構成をする時間が十分ではなかった生徒もいたことが分かる。今回2年生は初めて英語の授業でマッピングを行ったが、より早い1年生の段階から練習を始めるとともに、他教科や他の活動においても同様に取り組むことで、マッピングは表現力育成を目指すための、学校としての一貫した手立てになると考える。



第16図 マッピングが役に立った

#### ウ 学習支援の有効性

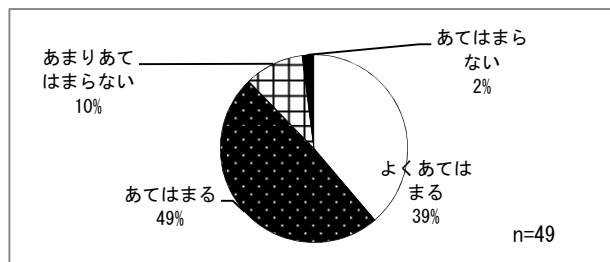
##### (ア) 鎌倉 BINGO

通常行っているBINGOの活動を「鎌倉案内」という表現活動に合わせて工夫することにより、生徒の題材への学習意欲を高めることができた。また、真剣に鎌倉BINGOに取り組む姿勢だけでなく、多くの生徒がマッピングの際にホワイトボードの横に鎌倉BINGOのシートを置いて活用する姿が見られたことから、鎌倉BINGOは、まとまりのある文章作成に向けたイメージ作りに有効であることが分かった。

##### (イ) お助け単語リスト

授業の振り返りアンケートでは、約88%の生徒がお

助け単語リストについて「文章を書くときに役に立った」と回答しており（第17図）、「接続詞が分からなかったとき」や「文をつなげるとき」にリストを使ったという生徒の感想からも、まとまりのある文章の作成に有効であることが確認できた。生徒の様子からは、分からない表現はまずお助け単語リストにある表現に目を通し、リストにないときは辞書を引くというように、お助け単語リストは生徒が自ら調べようとする姿勢を育むことにつながったことが分かる。



第 17 図 お助け単語リストを活用した

#### (ウ) 文章の書き方支援

文章の書き方支援を通して、英語が得意な生徒は、まとまりのある文章を書くということを意識して、接続詞や代名詞等を積極的に使用して書くことができた。また、英語を苦手とする生徒は、文を書くという個人作業になると文構造がほとんど分からない状況もあったが、マッピングで活発に自由な発想を膨らませた後、黒板に示した見本の英文の単語を入れ替えて、伝えたい思いを書くことができた。

## 6 成果と課題

本研究の成果として、「『書く』領域における3年間の到達目標」を作成することで学習目標を明確にし、自己関連性の高い題材を設定するとともに、文構造のスパイラルな活用と学習支援の工夫を取り入れた授業が、生徒の表現力の育成に有効であることが明らかになった。検証授業において作成した「鎌倉案内」の作品には、英文や写真、手書きのイラスト等の工夫を通して生徒の思いが表現されている。作品には読み手へのメッセージとともに、生徒自身の達成感を感じることができ、次なる表現活動への意欲につながっている。

一方、今後の課題としては次の三点が挙げられる。

一つ目は、正確な文を書けるようになるための指導における課題である。記述式問題の事前・事後調査で、文章に量的な伸びが見られた一方、「正確な文の数」については大きな伸びがなく、課題があることが分かった。文構造や語彙等の文法指導は生徒の表現力を支えるものとして、今後一層取り組むべき課題である。

二つ目は、文章の書き方支援についての課題である。マッピングは「何を書いたらいいのか分からない」という“*What*”の部分についての生徒の悩みを解消するために有効であったが、アイデアをどのようにまとまりのある文章に構造化していくかという“*How*”の部

分について、課題が残る。英語を苦手とする生徒が、見本の英文の単語を入れ替えて書くことで表現できたことは本研究の成果の一つであるが、今後生徒が自らマッピングを文章へ構造化できる力を育てていきたい。そのためには、1年次から自己紹介や家族紹介といった身近なテーマで、マッピングから文章に構造化していく活動を繰り返し行っていく必要がある。

三つ目として、自分の考えや思いを表現するために学んだことを自主的に活用しようとする姿勢が、まだ多くの生徒には育まれていないことが課題である。教える側の支援を待つだけではなく、文章を書く前に自発的にマッピングをしたり、辞書を引いたり、単語帳を作ったりして、自ら考えたことを表現するためにふさわしい語句や文構造等を探し出し、作成・発信できるような生徒を育てたい。そのためには、「『書く』領域における3年間の到達目標」を柱とした3年間のスパイラルな指導を長期的に実践し、修正・改善を重ねていく必要があると考える。

#### おわりに

本研究は、表現力を育むために「書く」領域に着目して、言語活動の充実を取り入れた授業改善研究に取り組んできた。書き始める前の段階で、他3領域における言語材料の十分な理解・習得の時間を確保する必要性を感じるとともに、生徒が自分の力で言語材料を活用して、「書く」領域において表現できるようにするために、今回作成した「『書く』領域における3年間の到達目標」を、4領域を総合的に指導する際の柱にしたいと考えている。4領域が有機的に関わった指導を模索しながら、今後も生徒の表現力の育成を目指し、授業改善に取り組んでいきたい。

#### 引用文献

文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編』  
田中武夫・田中知聡 2003 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店

#### 参考文献

大岩樹生・内藤浩悟 2011 「表現力・発信力を育てる評価」（『英語教育』5月号）大修館書店  
喜屋武真弓 2007 「『書くこと』における表現力を高める指導方法の工夫～Mappingの活用を通して～」  
([http://www.nahaken-okn.ed.jp/naha-c/ken\\_pdf/89/683.pdf](http://www.nahaken-okn.ed.jp/naha-c/ken_pdf/89/683.pdf) (2011.6.9 取得))  
村岡英治 2010 「確かな表現力を身に付けるための英語科授業の研究－4 技能を統合した英語による言語活動の工夫－」(<http://www.higo.ed.jp/edu-c/kokuryu/h22pdf/muraoka.pdf> (2011.6.9 取得))  
三省堂版 2010 『Let's Enjoy “BINGO”』浜島書店